

彼女は俺と同じ大学の文学部に通う二年生だった。頼りない、触れただけで折れてしま
いそうな体躯に、茶色がかった長い髪の間から雪の如く白い肌を覗かせている。

彼女には、虚言癖があった。

狼と神様の遊戯

白いキャビネットにバステル調の小物が綺麗に飾られている明るい雰囲気の部屋で、突
如として彼女はひとの度肝を抜くようなことを言った。「わたし、お母さんを包丁で刺し
て殺したの」と。

今から四箇月ほど前のことだろうか、まだ道端に、排気ガスで黒に汚れてはいるが、雪
が少し残っていた頃のことである。

文学部に通う、中学以来の友人である菰野こものから、彼女に虚言癖があるとは聞いていたが、
その予想外の発言に俺はどう答えていいのか分からず、とりあえず黙っていた。しかし彼
女は俺の沈黙を意に介すことなく、その西洋人形の如く整った顔を俺に向け、特に変わっ
た調子もなく、言葉を続けた。

彼女曰く、その時——彼女が彼女の母親を刺した時、彼女は高校二年生だった。部活を
終え、家に帰つてくると、包丁を今にも自らの喉元に突き刺しそうな母親を、彼女は見た。
彼女は止めようと、包丁を母親の手から取り上げようとす。が、その所為で母親は余計
興奮してしまつたらしい、母親はその胸に包丁を思い切り突き刺した。しかし即死ではな
かった。病院に運ばれた彼女の母親は、虫の息で何を言うかと思えば、酒が呑みたいと言
い続けた。酒が呑みたい、呑ませてくれ、そう言つて死んだ。

故に彼女の「母親を刺して殺した」という表現は、正しくはない。ただ、彼女は自分が
殺したのも同然でしょう、と静かな笑みを浮かべて言った。

「だからわたしは、お酒は飲まないの」

そして話を続けた。わたしのお母さんが自殺しようとしたのはね、と。

彼女曰く、彼女の父親は彼女が幼い時に死んでいて、彼女は母親と二人暮らしだった。
当時、その彼女の母親には十四歳年下の若い恋人がいた、しかし母親はその恋人に振られ
てしまった、だから自殺を図つた——まあ実際自殺したのだが——、という有体な話であ
る。

菰野の話で、これも作られたものなのだろうかとは思つたが、しかし、その整ったちいさ
な唇から流れ出す「話」は、贗物のようであると同時に、もし菰野の話を聞いていなかっ
たとしたら俺は信じていたかもしれない、と思わせるような真実味も帯びていた。

そのことを菰野に言つた時、菰野はそうだろう、と俺の言葉に同意した。

「下手なドラマとか映画より、本物臭いんだよ。俺だって晴海さんに教えられなかったら、
確実に騙されたままだったね」

晴海さんは大学近くの服飾店で働いている女性だった。二十代半ばぐらいなのだろうが、
三十代と言われるとそうとも思え、まだ十代だと言われても違和感がないようにも思える。
何処か不思議な雰囲気をいつも漂わせているひとで、春海さんと彼女は昔からの知り合い
であるらしかった。彼女が「母親を殺した」と言つた時も、晴海さんは俺の隣にいて、雑
誌に見入っていた。唯一晴海さんだけが、彼女が本当に辿つてきた道を知っているのだろ
うが、しかし晴海さんはそれを俺にも菰野にも、今まで他の誰にも言おうとはしなかった。

「知り合いにね、質屋で働いてる大学生の男のひとがいるの」

何時だか、大学食堂の喧騒の中で、俺の前に座る彼女が言った。

「あまり流行っていないんだけれど、けれど質屋というお店には、不思議なものがやってくるものでしょう」

彼女は、そして話し始めた。

セオコタロウ、というのがその質屋勤務の男性の名である。彼の勤務する質屋は見た目からして陰気で、位置する場所も盛りをとうに過ぎた、寂れた住宅街外れだという。消費者金融の勢いに負け、廃業する質屋が多い昨今、どうしてあの質屋が潰れないのだろうか。と、それはあの質屋は裏の仕事に手を出しているからだ、などと言う噂が近所でもことしやかに伝わっているくらいらしい。客はひと月にひとり来ればいいほうである。

その客が来た日、油蟬がそこで騒がしく鳴いている真夏日であったそうだが、質屋店主は留守にしており、セオさんがひとり店番を任されていた。客が来る日のほうが寧ろ珍しいので、セオさんが明日提出期限であるレポートに取り掛かっていると、その客はやって来た。

客は、銀髪を整えた、茶色の肌の顔に深い皺を刻んだ老人だった。

今年一番の気温を記録するほどの暑さだったというのに、老人は冬のグレーの背広を着込んでおり、その顔は無表情、細い体軀だったが、一種の気味悪さを憶えるほど存在感があった。

客である老人は、左手に持っていた革製の鞆から、大切そうに十五センチ四方の箱を取り出した。老人はその箱を開けるようにセオさんに言い、セオさんが蓋を開けると、そこには素人目にも高価なものだと分かる、猪口が入っていた。内側に、鮮やかな朱で金魚が一匹、描かれている。

「これを引き取って頂きたいのです」

「いまは、僕しかいないんです。僕ではこういう高価なものは査定出来ません」

セオさんは断った。

「査定しろと言っているわけではありません」

老人は、大声で言っているのではないのに、よく響く声で否定した。

「引き取っていただければ、それでよいのです」

ここは質屋です、ご存知ですかとセオさんは言ったが、老人は、それは知っている、わたしはこれを引き取って貰えばそれでいいのだと、同じ言葉を繰り返すばかりだった。

「これは亡くなった家内が大切にしていた猪口なのです。結婚二十年を記念して私が贈りました。家内がとても欲しがっていたものだったので。家内はこの猪口でしか酒を飲みませんでした。家内は最期まで、この猪口を大切にしておりました。私はこれを見ると家内を思い出すのです。もう手放したいのです」

老人は言った。捲し立てているような口調ではなかったが、セオさんはその話を制止することが出来なかったという。

セオさんはレポートを仕舞い、猪口にまつわる話を終えた老人に、とにかく中に入って店長を待っていてください、と言い、奥に案内した。

「麦茶でいいですか」

微臭い炊事場に立って老人のほうを振り向くと、老人はささくれ立ち、黄色に変色した畳の上で、背を伸ばして正座をし、卓袱台の上に置いた箱の中身をじっと見つめていた。家内は白鞠という酒しか飲まなかったのです、だからこの猪口には白鞠しか注がないてくださいとだけ言って、セオさんの問いに対する返事はしなかった。

セオさんは溜息を吐くと、グラスを出して、それに埃がうっすらと溜まっているのを見さつと水で洗った。そしてあまり冷えていない麦茶をグラスに注いだ。そこでふと気がついて菓子をはたばたと探し、やっと準備を終えて老人を待たせていた部屋に戻ると、そこ

に老人の姿は無かった。ただ、猪口の入った箱だけが残されていた。

「そのあとで店長さんが帰って来たのだけれど、セオさんは店長さんにこの出来事を黙ったままでその猪口を家に持ち帰って、それから『白鞠』について調べたそうなの。『白鞠』というお酒は、何処にでも売っているような安いお酒で、それならとセオさんはその『白鞠』を猪口に注ぐことにした。何だか変な話でしょう。そんなこと、しなくたっていいのに」

ふふ、と彼女は笑った。騒がしかった食堂は、殆どひとがいなくなっていた。俺と彼女の座る席の四つほど向こうの席に、男女が五人、いるだけだった。

「そうしたらね、ちゃぶんつて、猪口から音が聞こえたんだつて。何だろうつてセオさんが見たら、金魚の柄が少し変わっていたの。その柄のある位置が違っていたの、まるで金魚がお酒の中で泳いだみたいに」

人間関係における嘘は一種の「潤滑油」のような働きをしているという。嘘がまったくつけないければ会話は滞り、言い訳や責任転嫁、これらは嘘と言っても、多少語弊はあるが正常である。異常であるというのは、虚言癖、精神疾患の一つである虚偽性障害のことだ。

その虚言癖であるが、嘘を吐くことでストレスの原因から一時的にはあっても逃れ、精神に関わる健康を保つ効果があるらしい。ただ、この虚言癖が病的になってくると、己の作った空想と現実とを見極められなくなり、現実認識に支障が出る。つまりは有害無益、百害あって一利無し、決して現実積み重なっている諸問題を解決する方法などでは無い。

晴海さんが夕食を振舞ってくれると聞き、俺と菰野は彼女の家に向った。彼女はページユのエプロンをつけて、今日は腕を揮いますと笑顔で言った。大体夜七時頃に料理は完成し、湯気が立つそれらを、俺と菰野は遠慮なく食した。菰野は酒も湯水の如く呑んだが、対する俺は運転手係だった為、烏龍茶で我慢していた。そして現在、真夜中、酔いが回って大の字に寝ている菰野のいびきと、テレビから流れ出る芸能人の笑い声だけが室内に響いている。晴海さんは麦酒を黙って飲んでいて、俺は同じく黙ってテレビをぼんやりと眺め、彼女は近くの二十四時間営業のスーパーへ買出しに行くと言って、いなかった。

どれほどかわからないのだが、そうして馬鹿笑いをして騒ぐ芸能人を見ていると、突然晴海さんが言った。

「あの子は自分が何言っているのかちゃんと分かっている。だからこそ狡いかもしれないけれど。きつと、『森を見て木を見ない』つて少しニュアンスは違うけれど、こういうことを言うんだろうね」

俺は驚いて晴海さんのほうを向いた。「どうしたんですか突然」

「交通事故なのよ」
俺の質問に答えず、晴海さんは言った。

「交通事故なの、あの子の母親の死因。飲酒した後に運転して、事故起こして、死んだの」
晴海さんは言う。

「ただ、あの子の母親、わたしは直接会ったこと無いけれど、そんな風に飲酒してから車を運転するようなひとじゃなかったみたいなの。それなのに、あの日はそうだった。何故だか分かる？」

晴海さんは俺の返事を聞くことなく、続ける。

「恋人がいたの。若い恋人。十四歳年下で、大学生だった。あの日、あの子の母親はその

若い恋人から『別れてくれ』と電話を貰って、そして一方的に切られた。酒を飲んでいただけで、そのようなことは気にしなかった。急いで若い恋人の家に向おうとして、そして事故を起こした。あの子の母親は恋人から貰ったものを全て大切にとっているほどだったらしいけれど、若い恋人のほうは遊び半分だった。だから母親が結婚を暗に催促するようになるまで面倒になった。嫌になった。だから別れを告げた。それで、その若い恋人っていうのは、

晴海さんは言葉を切った。時計がちょうど十二時を告げた。

「私の兄のこと」

「どうして突然、こんなこと言うんですか」

俺は訊いた。晴海さんは俺のほうではなく、グラスの端に残った麦酒の泡を見ていた。晴海さんの後ろの仏壇には、彼女の母親の写真が飾られている。そしてその写真の前に、朱の金魚が描かれ、酒が注がれた猪口があった。横に置かれた何処にでも売っているような酒は、聞き覚えのある名だった。俺の質問に、晴海さんは本当に不思議そうに答えた。

「分からない。どうしてだろうね」

そして今度は咳くように、

「どうしてだろうね」

帰ってきた彼女は、菓子や酒が入ったビニール袋を無造作に放り出すと、突然海に行きたいと言いつ出した。真夜中であつたし、朝に講義が入っているのではじめは断つたのだが、彼女は聞こうとしない。春海さんは酒を飲んでいたし、菰野は酒を飲んだ上に寝てしまっているで、結局俺が彼女を海へ連れて行くことになった。

春の海は静かで、当然のことながら、ひとひとりとしていない。海の風は冷たく、頬を撫でていく。

あそこがいい、と他とさして変りの無い砂浜を指差した彼女は、そこへ駆けていき、俺が隣に座ると同時に堰を切ったように話し出した。色々なことを。色々な話を。嬉しそうに、哀しそうに、楽しそうに、様々な感情を交えながら。

ただ、俺はその話をここであえて書くことはしない。

彼女が話を終えると、真つ暗な海は静かになった。俺に沈黙を破る気は無かった。

沈黙は暫く続き、

「わたし、時々考えることがある」

夜空を見上げながら、先程とは対照的に、静かな調子で彼女が口を開いた。

「神様は、わたしたちを人形代りに遊んでいるだけなのじゃないかって」

彼女の横顔は、俺が知っている彼女には見えなかった。俺は矢張り黙っていた。

「だって神様はひとを幸せにするためにいるんでしょ？ それなのにひとは哀しかったり嬉しかったり、誰かが喜んでる時に誰かが泣いているわけでしょう。もしこれが神様の遊びとかでないなら、他に一体何があるの」

わたしにはそうとしか思えない、と彼女は言った。俺には彼女へ言うべきことが見つからない。晴海さんはこの話を聞いたことがあるのだろうかと思つた。もし聞いたのなら、晴海さんは一体どのように答えたのだろうか。

沈黙する俺に、彼女は返事を促そうとはしない。彼女も口をつぐみ、風に揺れる木々の音しか聞こえなくなる。一瞬、彼女が隣にいるのかどうか分からなくなった。彼女がここにいるのかどうか分からなくなった。こうして俺が黙っている間に、彼女は闇の中に融けてしまったのではないか。僕の現実をつくって語る彼女のほうが、今の彼女よりはっきりと

した輪郭を持っていたように思える。俺は晴海さんの言葉を反芻する。

雲で隠れていた三日月が現れ、闇に紛れていた彼女の横顔がうっすらと照らされる。月明かりを浴び、闇に仄かに浮かび上がる彼女は相変わらず人形のように、そして今にも消えてしまいそうなほどに儚げであった。ほつれた細い髪のかかった、その非現実的なまでに整った顔を俺は見る。と、俺の視線に気付いたのか、彼女が静かに俺のほうを向いた。そしてやさしく、しかし何処か淋しそうに微笑んだ。

あとがき

これもオチに救いがなくて気に入っている話。死

嘘吐きな綺麗な少女、というのは使い古されたネタだと思っけれど、いつか使ってみ
たかったので、こんな形になりました。

構成もそれなりに満足。途中の虚言癖についての件ですが。因みに、中身はウィキペ
ディア使用の薄っぺらさ。気にはしていない。

そして、某小説の影響がところどころに垣間見えるのは、きつと頭が疲れてるからだ
よ！こうして振り返ってみると、荒が酷い話だよ！こふっ（吐血）